

第2回安房地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年2月9日(木) 午後2時から4時まで
- 2 場 所 千葉県南総文化ホール 大会議室
- 3 出席者 15名/16名
- 4 概 要

(1) 第1回安房地区地域協議会の記録(案)について

委員に確認し、承認

(2) 「県立学校改革推進プラン」再編対象校に係る成果と課題について

資料1「県立学校改革推進プラン再編対象校に係る成果と課題について」に基づき事務局より説明

(3) 安房地区の県立高校の在り方について

① 「普通科及び普通系専門学科・コース」について

【座長】

それでは、まずは、「普通科及び普通系専門学科・コース」について、委員の皆様から御意見を伺いたいと思う。事務局に確認するが、「普通科及び普通系専門学科・コース」というのは具体的には安房高校と長狭高校のことと考えてよろしいか。

《事務局》

よい。

【座長】

ではまず、安房高校及び長狭高校の今後のあり方について、今後生徒により良い学びをできるようにするためにはどうしたらよいかという観点で、その2校について御意見を伺う。

【委員】

では口火を切らせていただく。安房地域の中にあって安房高校は、普通科の高校として、そして県下で10校指定されている進学指導重点校のひとつとして、子どもたちの学びに向き合っていかなければいけないだろう。その中で前回もちょっと話題になったが、この地区から他学区の私立高校に流出をしてしまう現状も我々は認識しなければならない。安房地区の県立高校が残念ながら選ばれていないという状況について、学校は厳しく認識しなければならないだろう。その中で安房の子を安房で育てられる環境づくりに努めなければならない。安房高校では具体的な試みを進めている。例えば、安房地区には大学がなく大学生があまりいないので、大学がどのようなものかはなかなかイメージが湧かない。そこで、国内外問わずいろいろな大学と教育連携を結び、オンライン等も活用しながら大学での学びを、生徒に体感させるような試みをしている。また、安房地区には大手予備校はないが、子どもたちを小さい頃から面倒見ている地元の学習塾がたくさんある。そういったところと連携をして子どもたちの学習の充実に向けていけるとよい。それらを、遠くに行かなくても安房の子は安房でしっかり学ぶことができるというような環境づくりに繋げたい。

【座長】

事務局に確認したいが、今後の安房地区の県立高校の在り方については、この協議会での議論は、具体的にはいつ頃までを視野に入れてのことだと考えたらよろしいか。

《事務局》

本協議会は令和4年から令和13年にかけての10年の県立高校改革を示した「県立高校改革推進プラン」に則って開催していくものであり、基本的にはこのプランの10年間を意識して御発言いただきたい。少子化によって生徒数が減少していく中で、地域としてどう対応していくかというところについて、適正規模についての御意見は次回に御発言いただくこととし、今日は学びに絞っているので、それぞれの学校の学びをどう魅力的にしていき、地域の子どものための教育を担保していくかという視点で御意見をいただけるとありが

たい。

【座長】

今後の10年間を見据えてということで確認をさせていただきたい。また、学級数や学校の規模についての議論は次回ということでよいか。

《事務局》

よい。

【座長】

では今の安房高校についての話があったが、他の委員はどうか。

【委員】

実際に高校を選ぶ中学校の進路指導について、どういう観点で子どもたちが進路先を選択しているのか。実際、この地区の県立学校で定員が満たされているのは安房高校だけであり、あとは定員に達していない状況である。中学校ではどのような対応をしているのか。

【委員】

実情は募集定員に反映されている。やはり大学への進学志向が昔より高くなっており、大学に進学できる学校を選びたいということになる。高校卒業後に就職しようという子どもが減少しており、行けるのであれば安房高校に行ったらどうかという志向が強くなっている。この傾向は、学区外の私立高校に進学する割合の増加にもつながっている。

【委員】

様々な調査の中で、中高生の将来就きたい職業は公務員的なものが多い。小学生はYouTuberが多いが、中高生は公務員や教員などが多く、女子については幼児保育系の希望が高い。そのような傾向も踏まえ、今後の県立高校のことも考えていければよいと思う。

【委員】

中学生で将来就きたい職業が決まっていない生徒については、普通科に進学し3年間の中で具体的な将来について決めていくことが多い。実際には、大学進学だけを考えると普通科だけではなく、職業系専門学科でも指定校推薦があったりする。大学＝普通科だけではない。

【座長】

長狭高校についてはいかがか。

【委員】

長狭高校に学校運営協議会の委員として関わった経験から話させてもらうが、非常に子どもたちの様子が落ち着いていると感じた。ところが実際に進路状況を見てみると、昔に比べて4年制大学に進学する割合が少ない。医療・福祉コースを設置したが、どのような教育をして、その効果についてはどうだったのか。

【座長】

これについては、事務局から説明をお願いしたい。

《事務局》

医療・福祉コースを立ち上げの段階では、亀田病院に御協力をいただいた。子どもたちにとっては医療と言えば医者か看護師か薬剤師ぐらいしか知らないと思うが、実際には言語聴覚士や理学療法士、作業療法士など様々な仕事が医療にあることを気づいてもらうために、1年生全員に対して亀田病院から全ての職の方に来ていただいて説明していただいた。それを聞いて興味関心を持った生徒は2年生から医療コースや福祉コースに分かれて授業を受ける。福祉コースは、地元の社会福祉法人に御協力いただきながら現場での実習などを行い、初任者研修修了者資格を全員に取らせる。医療コースは亀田病院と引き続き連携し、3年生の時には実際に現場スタッフとともに行動する「シャド体験」などを通し、非常に高いモチベーションを持って卒業していく。卒業後の調査でも、回答があった12名のうち11名が実際に地元で医療の職についてい

る。これは本当に大きな成果である。一方で課題でもあるが、医療・福祉コース以外の進路について周知が足りない。理系で工学部や理学部に行きたいとか、法学部に行きたいというような生徒にももちろん対応するし、チャレンジしてレベルの高い大学に行きたいような生徒たちには、希望を聞いて、教員がマンツーマンに近い形で指導して進路実現に向けてサポートしている。医療・福祉コースが地元で目立ち過ぎて、医療・福祉に行かない子は関係ない学校であるという誤解は避けたい。医療・福祉をひとつの看板にしながら、あらゆる進学への対応をしている学校というように受け取っていただければよい。また、最近では男子バスケットボール部が頑張っており、県総体とウインターカップ予選において県で第2位に入った。南房総でバスケットをやりたい子は目の色が変わったのではないかという気がしている。

【委員】

市内のおよそ3分の1の生徒は長狭高校に例年通っている状況である。ただ、安房地区の東の端にある鴨川市であることから、隣接学区のいすみ、長生地区に進学する生徒もいる。また、他学区の私立高校にバスで通う生徒も多い。このように、鴨川市の中学生の進学先は多種多様である。一番多い時には市内の半分近くの生徒が長狭高校に通っているような年もあったが、子どもたちのニーズも多様化しており、長狭高校への進学者が減少しているのは寂しく感じる。医療・福祉コースのアピールや、大学によってはチャレンジしていくようなところまでできるということについても周知が必要であると感じた。

【委員】

例え話だが、ある高校生が大学を選ぶ際に、ネームバリューがある私立の某大学に入るという目的で受験勉強をし、入学できたことがゴールになってしまい、その後の4年間の大学生活は、勉強がおろそかになり、何とか卒業できた。一方で、別の高校生は、ある大学のある先生に教わりたい、あるいはその研究をしたいという目的で大学に入学し、その教授のもとで4年間勉強し、非常に有意義な4年間を過ごし、社会に役立つような仕事に就いた。非常に極端な例かもしれないが、昔は安房高校と長狭高校、生徒はどちらに行きたいかというよりどちらなら入れるかという観点で選んでいた生徒が多かった。中学校の三者面談の時に、何点だったらどちらかということを経験が指導していた。あるいは、通学費などの観点から、館山市内の生徒で、安房高校が届かなかつたら館山高校という選び方をする生徒もいた。普通科、工業科という選び方ではなく、入れるかどうか。今はどうかというと、各校の特色が色濃く出てきており、安房高校に行けばこう、長狭に行けばこう、そういう特色が出てきたことは非常に良いことだと思う。もっと中学生が目的を持って行けたらよい。

【委員】

安房管内に受験生が800~900人くらいいる中で、併願を含めるとおよそ半分ぐらいの生徒が管内の私立高校を受検している。中学校の先生方と話す、併願校については例えば医療・福祉を希望しているので長狭高校へ、あるいは大学進学を希望しているので安房高校へというような話を伺うことが多い。長狭高校の課題については、医療・福祉しかできないと中学生が思い込んでいるところがあり、進学に特化した学習指導もあるということを対外的に報告し、多様な展開があると周知した方がよい。普通科だけではなく職業系専門学科や総合学科についても、館山総合高校や安房拓心高校など、各校のそれぞれの特色を出していただき、それに負けない私学という形で、この安房地域の中で公私共存していけると良い。

② 「職業系専門学科・コース」について

【座長】

続いて、「職業系専門学科コース」について意見交換をお願いしたい。事務局に伺うが、具体的には、館山総合高校のことでよろしいか。

《事務局》

それでよい。

【座長】

平成20年度に館山高校と安房水産高校が統合して館山総合高校となり、現在は工業、商業、海洋、家庭と、四つの専門学科がある。

【委員】

館山高校と安房水産高校を引き継いだ館山総合高校の在り方について考える際に大きいのは、「地域とともに」という考え方である。文部科学省のスーパープロフェッショナルハイスクール事業に指定され、地域の中で何ができるのかという視点で専門性を高める取組を行ってきた。例えば館山駅前の開発に高校生として何ができるのか、あるいは地元の食材を生かした食品開発や、海の環境について海洋科に何ができるかなど。これらのことは高校生だけではできないことも多く、地域の方々の御支援をいただきながら、非常に活発な教育活動を展開してきた。また、館山総合高校には、全国でも十数隻しかないという大型実習船を保有しており、そのような大切な教育財産をいかに活用し、子どもたちに還元していけるかということも今後非常に大きなことになってくる。

《事務局》

海洋科について補足させていただく。千葉県では普通科志向が非常に強く、安房地域だけでなく全県的に専門学科が苦戦している。4つの専門学科を有する館山総合高校においても同様であり、定員の五〜七割ほどしか充足していない現状がある。特色ある海洋科においても同様である。以前は水産単独校が県内に3校あったが、現在は海洋科としては銚子と館山の2カ所にしかない。館山の特徴は船乗りの育成であり、引き続き専攻科でさらに2年間学ぶことで3級海技士という、外国船の船長にもなれる資格が取れるのが大きな特徴である。ところが専攻科でさえも、なかなか生徒が集まらないという状況であり、生徒には魅力ある学びをぜひ体験し、卒業していつてもらいたいところだが、なかなか現状そうはなっていない。委員の皆様には、そのような視点を踏まえ、子どもたちが夢を持って館山総合にきてもらうためには、どのような努力が県教委や高校に必要なのか、また地域として、どのような御支援がいただけるのかという観点で、ぜひ御意見いただきたい。

【座長】

ではいかがか。

【委員】

県立学校の校長先生方から各学校の取組や課題について伺う機会がある。その中で非常に興味深かった点について話をさせていただく。高校側は外部への情報発信や地域連携など様々な取組を行っており、特に実業系の学校は頑張っている。館山総合も安房拓心も、木更津方面であれば木更津東高校の家政科なども、様々な努力をしている。本当に様々なイベントを市町村行政や近隣の小中学校と連携して行っており、そのイベントだけを切りとれば、非常に評価も高い。地域も喜んでいて、関わった小学生中学生も目を輝かせながら参加をしている。それに対して高校生も非常にしっかりとした手ごたえを得ている。しかし、これが志願者増加には繋がらないという現実がある。関わった小中学生の多くが、結局普通科を選んでしまう。高校、特に実業系の学校の努力と志願者数の増加が結びつかない根本には、産業構造がある。館山総合に行ったらその先に何があるのか。安房拓心に行ったらその先に何があるのか。卒業後に地元で雇用がしっかりあるのか。あるいは、高校で様々な地域と連携した活動をし、そのまま地元で就職をするのか。もし大学に行きたかったらいけるのか。大学に進学し4年後に地元に戻ってくる保証、つまり地元の受入環境があるのか。そういうところまでを見据えて環境整備していかないと解決には繋がらない。中学の進路指導から始まり、絞り切れないから普通科に進み、普通科在学中にも絞り切れないから4年制大学に進み、どうしようどうしようと言っているうちに、都会の方で就職をして帰ってこなくなり、地元の産業も衰退してしまう、という悪循環が発生しているのではないか。今現在も実業系の学校を中心に、普通科の各種コースも含めて、地元へ発信しながら本当に頑張っており、地域も連携をしながら今後も支え続けていくわけだが、その先の受け入れを

どうしていくかということは、地元行政の分野でもかなり掘り下げて、深く考えていかなければならない状況であると感じる。

【委員】

保護者の立場からの意見であるが、自分の娘が学区外の私立高校への進学が決まった。高校選びの際には、子どもたちへの学びの周知もちろん大事だが、親へのアピールも大切である。体験入学に親子一緒に参加するケースも多い。今回進学を決めた高校の説明会に参加させていただき、親子ともどもインスピレーションを感じて進学を決定した。子どもが一番に行きたいところに行かせるというのが親の務めであるが、保護者の意見というのも大事であると、改めて強く感じた。高校の体験入学にできるだけ保護者も一緒に参加し、親も一緒に学校の雰囲気味わうと、違った方向性が見えてくる。また、娘が通う塾で伺った話だが、ここ数年、時代は私立であるという考えの保護者が多くなっているようだ。そのあたりもやはりどこかで力を入れて考えなければならぬと感じたところだ。

【委員】

職業系の専門学校について、現役の高校生たちが小学校に行って小学生のキャリア教育支援を行い、実際に何ができるのかを示しながら一緒に活動していく中で、将来こんなことができるようになり、こんな職業につけるのだというようなことを小さいうちに示してあげることも大切なのかなという気がする。やはり、ひとつの資格を取るということは大きな特技である。小学校の生活科や総合的な学習の時間などを協力しつつ、そのあたりのアピールもできれば理想だと感じた。中学校のキャリア教育支援でも問題ないだろうが、学年が上がるにつれ、その先の進路のことがちらついてしまう。

《事務局》

保護者の意見は大変貴重であり、県教委としてもやはり保護者への魅力発信も重要であると考えている。参考として質問させていただきたい。先ほどの委員の発言の中で、見学に行った私立高校に親子でインスピレーションを感じたとあったが、どんなところがよかったのか、ぜひ教えていただきたい。

【委員】

志望校を決めるまでにいろいろな高校の説明会に伺った。どの高校でも挨拶はあったが、入学を決めた私立高校では生徒も先生も皆挨拶をする際にしっかり立ち止まっており、挨拶が終わるまではその場から離れなかった。要は、「ながら挨拶」をしないということを徹底されていた。娘は英語が好きだったので、英語教育に力を入れており、英検資格所持で特待生受検ができるというところも魅力ではあったが、勉強面だけでなく挨拶を通して人間としての在り方をしっかり教育されている所が決め手となった。

《事務局》

逆に、また、県立高校にも体験に行かれたと思うが、県立に足りなかった部分や、ここがこうだったら少しは考えたとか、そのような意見があれば伺いたい。

【委員】

足りないとはなく、他にもいろいろと行かせていただいた中で、どの高校でも生徒も先生もみんな良い雰囲気を感じることができた。

【委員】

保護者の立場として、自分自身も高校は他学区の私立に進学しているが、自分はバスケットボールをしていたので、バスケをするのであれば学区内に留まらずに上に出るという考えがあった。今は長狭高校に良い指導者がいるので、有力な生徒が集まって強いチームになっているが、当時は地元の高校に入ったら上りのチームには勝てないというのが現状であった。また、スポーツ推薦などで有力な生徒が集まる私立高校ではチーム内での競い合いがあり、それによって切磋琢磨して向上することができる。もちろん地元に残るから駄目ということではないが、保護者という立場になったときに、学校の評判はやはり気になってしまう。あまり素行の良くない生徒が居たりするよりは、先生が多く目が行き届いている私立高校に行ったほうが良い

いという考え方もある。学力が優れているのであれば、安房高校や長狭高校に行って医療や福祉の方に行くという考えもあるが、実際、勉強が苦手な子どもや情緒不安定な子どもが、地元でどこの学校に進学したら、本当に適正に高校生活を行えるのか、そういったことを考えると上り方面の地域連携アクティブスクールに行かせた方が良い。何かを特化してと考えれば、専門学科であれば館山総合高校であるが、特に何もなければ私立高校に行くという考えも多いのかもしれない。

③ 「総合学科」について

【座長】

次は「総合学科」についての意見交換だが、具体的には安房拓心高校についてのことと理解していただきたい。安房拓心高校は安房農業高校が前身であり、生産技術科、農業工学科、農業経済科、食品調理科と4つの学科を有していた。平成16年度に校名を安房拓心に変更し、翌年の平成17年に総合学科が新設された。総合学科という学科自体について、少々分かりづらいところがあるだろうから、事務局に改めて説明をしていただきたいがよろしいか。

《事務局》

高等学校の学科には、普通科、理数科などの普通系専門学科、工業、農業、商業などの職業系専門学科があるというのが以前の状況であった。ところが、普通科に行く生徒が増加するにつれて、半数以上が就職するというような学校も増加し、そのような学校を卒業して就職するにあたって、例えば簿記だとかビジネス関係のような専門的な学びを通してしっかりと社会人となって生きていけるスキルを身につけさせようというところから総合学科が始まった。総合学科では、1年生は全員共通科目を履修する。これは普通高校の方と一緒にいる。ただし、総合学科では「産業社会と人間」という教科を必ず履修させる。そこではキャリア教育と職業教育を通して将来について考えようというガイダンス的な授業である。そのうえで、2年生になったら、専門的な学びを履修する「系列」に分かれる。例えば安房拓心高校では、2年生以降、英数国を含めた文系理系の科目を学ぶ「文理系列」、農業について学ぶ「園芸系列」、酪農発祥の地である南房総ならではの「畜産系列」、測量などの技術を学ぶ「農業土木系列」、もうひとつはかなりの特色であるが「調理系列」。実は安房拓心高校の調理系列で学ぶと、高校卒業の時点で調理師の資格が取れる。千葉県内の県立高校において高卒で調理師の資格を取れる学校は安房拓心高校と佐倉東高校の2校しかなく、先ほど話題に上がった海洋科と同様、非常に貴重な学びである。総合学科は普通科、職業系専門学科に次ぐ第3の学科として設置された、普通科と専門学科の中間的な学科であり、入学時点で専門を選ばなくてもよいという学科である。千葉県には全日制の総合学科が6校ある。都市部では、進学に特化できるような総合学科として幕張総合や小金があり、郡部では職業系の科目中心の総合学科として、八街高校、大原高校、安房拓心高校、君津青葉高校の4校がある。

【座長】

それでは意見交換の時間だが、例えば、総合学科そのものに対する疑問、質問でも結構である。ざっくりばらんにお話いただきたいかがか。

【委員】

私は酪農をやっており、安房拓心高校からすぐ近くにあるということで、安房拓心高校の良い点についてお話ししたい。安房拓心高校の園芸系列の生徒は、近所の嶺南小学校に出向いて小学生に大根の作り方や花の苗の植え方を教えている。大根を植えたら大根の収穫まで行き、花の苗を植えたら花と一緒に育てていくということを、園芸系列の生徒が行っている。畜産系列に関しては、安房拓心高校で作ったヨーグルトを嶺南小学校に持って行き、給食のときに一緒に食べる。そうすることで、小学生は必然的にお兄さんお姉さんに憧れを持って、私も安房拓心高校に入りたいなという夢を持つ子もいるようだ。また、うちでは畜産コースの生徒の夏休み中の実習の受け入れを行っている。仮に非農家出身の生徒であっても、実際に体験するこ

とで、将来酪農家になりたいとか、酪農に関する職業に就きたいという夢を持つ子がいて、実際にその道を選んでくれている子もいる。安房拓心高校の魅力は地域との関わり方である。地元の人が生徒に教える。生徒は小学生に教える。そのような特色があるのは一番良いところである。酪農家自体は年々減少している。先ほど事務局からあったが、南房総市は酪農の発祥地でもある。地元特有の産業を残していくためにも、こういった特色のある高校を何とか残していきたいと思うところである。

【 委 員 】

南房総市においては、安房拓心高校の存在が非常に大きいものがある。小中学校との交流が非常に頻繁に行われており、それぞれの系列で頑張っ特色を打ち出している。牛の全国大会でも賞に入ったり、安房拓心高校で育てているシクラメンが南房総市のふるさと納税の返礼品にもなったりしており、非常に行政ともマッチして、強味を發揮していると思う。安房拓心高校は中学生にも人気がある。ただ、非常に申し上げにくい、和式のトイレが多いのが難点である。洋式のトイレ、暖かい便座のある私立高校に比べると、県立高校は女子トイレ、男子トイレともに和式のトイレが多く、中学生やその保護者は学校見学の際に公立と私立の差を感じているようだ。

【 座 長 】

設備のことは、次回協議会でも議題にしていく。

《 事務局 》

実際、それも私立学校の魅力のひとつであり、それは私学に水をあけられている部分である。

【 委 員 】

館山市で移住のお手伝いをしている。皆さんのお話を伺いながら、娘さんが域外に進路を決定され、あるいは御自身が域外の私立高校の御出身であるという話も伺い、実は自分も域外の私立高校に通っていたので、一言だけ意見を申し上げたい。私どもの法人が行っているのは、館山に移住をしたいという方への支援活動であり、いわゆる大きなマーケットに受けるような形というよりは、田舎暮らしをしたい、館山みたいな所に住みたいという方を対象に、小さな需要を狙っていくということをしている。そういう意味では、この安房地域の高校で今後生徒を集めるときには、大都市圏の東京都や千葉の県北にあるような高校と違って、おそらく小さな特色のあるマーケット、小さなニーズを拾っていくことも大事であると思っている。そういう意味では、安房地域の各高校の特色は興味深い。実は私も今は調理師をしているが、例えば調理師免許を取れるというの大きな特色だと思う。移住者の人たちのお子さんの進路を考えると、決して高い学歴を求めるような志向の人が多いわけではない。これからこの地域が活路を生み出していくひとつの方策として移住してくる人達を増やすということを考えたときに、各高校の持つ特色・魅力あるコース等が周知されていないために生徒が集まらないという話は大変もったいないと感じる。各コースのネーミングが非常にわかりづらいのではないのか。工業科や商業科、海洋科、家政科など、専門学科についても同様である。家政科などは名前だけではイメージが沸かない。安房拓心高校の総合学科についても、先ほどの説明を伺って初めて知ったという状況であるが、移住者の中には農業をやりたいという人も多く、安房拓心高校のような学校はとても魅力的である。農業の道へ子ども達を導いてくれるような進路がある高校が、ここ安房の地にあるというのはとても大きなことである。だからネーミングひとつでイメージを持ってもらうことは大切である。海洋科についても、海洋の科学的なことを学ぶのか海洋ビジネスの学科なのかちょっとわかりづらい。先ほどの事務局の説明では「船乗りを育成する」という非常にピンポイントの話であった。であるならば、例えば、「船乗り育成科」のようにわかりやすい名前の方が実はマーケティングに使いやすいのではないかと感じている。地域の子どもたちをマーケットにする時には、ピンポイントに小さなマーケットを拾っていくことで、実は将来的な志願者数の増加に繋がるのではないかという気がしている。

④ 「社会のニーズに対応した教育」について

【座長】

続いてのテーマは、「社会のニーズに対応した教育」である。これは具体的には、長狭高校と館山総合高校の定時制課程、及び館山総合高校にある通信制協力校、この3つについてである。通信制協力校については、事務局から改めて説明していただけるか。

《事務局》

全日制課程では3年かけて卒業するところを夜間定時制課程では4年かけて卒業する。しかし最近では、昼間仕事しながら定時制に通う、いわゆる勤労学生はほとんどいなくなっている。それよりも、不登校や家庭の都合等さまざまな事情により全日制に通いづらい状況の生徒が多く入学している現状がある。そのため、0時間目の活用や通信制課程の併修などにより3年間で卒業できるような工夫も高校は行っている。また、千葉市の生浜高校、松戸市の松戸南高校、佐倉市の佐倉南高校は午前部・午後部・夜間部からなる三部制定時制高校であり、これらの学校では他部履修という制度、例えば午後部の生徒が午前部あるいは夜間部の授業をプラスアルファで履修することにより、3年間で卒業も可能である。館山高校と長狭高校については夜間定時制の課程である。また、通信制については、千葉県内には通信制の県立高校は千葉市の千葉大宮高校1校だけである。通信制課程では、大半がレポート等による指導であるが、前期と後期でそれぞれ10回程度は本校舎での通学指導（スクーリング）を行う必要がある。館山の子どもが千葉大宮の通信制を卒業するためには、毎年20回程度スクーリングのために千葉市に行かなければならず、これは現実的に厳しい話である。そのような流れから、通信制協力校を作り、本校には最小限必要な年間行事、例えば、入学式とか卒業式など、本当に一部だけ通えばよく、大部分は地元でスクーリングができるよう体制を整えた。館山総合高校では、海洋校舎に通信制専用の教室を設け、千葉大宮のスクーリングを年間10日から20日間ほど行っている。平成29年度より始まった制度で、既に卒業生が3回出ており、中には卒業後に公務員になった生徒もいる。

【座長】

それでは意見交換に移らせていただく。

【委員】

館山総合高校の定時制で3年間教頭として勤務していたことがあり、通信制協力校にも多少関わらせていただいた。必ずしも今それを利用している生徒数は多くはないものの、いずれも公教育として本当になくしてはならないものであると感じている。当時は、小中学校時代に不登校を経験した生徒が多く、中には二十歳近くになってようやく自宅から一歩外に出られるようになったということで改めて高校に入学したという生徒もいた。そのような中で私が未だに忘れられないのが、ある日の休み時間に生徒が二人ほど話を聞いてくださいと職員室に入ってきた。聞けば期末試験の範囲がもう終わったからということで、残りの時間が自習になってしまった教科があるという。その授業担当は生徒が試験勉強できるよう、よかれと思ってそうしていたことだが、その生徒にとっては、学校に来ているのは自習をするためでも試験で良い点を取るためでもなく、学びたいからであるということであった。私は大変衝撃を受け、すぐに先生方を集めて、その生徒の言葉を伝えた。これは定時制の子どもだけではなく全ての子どもにいえることであり、いわば学校教育の原点のようなものであると思う。

【座長】

館山総合高校の定時制の実情を伺うことができた。長狭高校についてどなたか話を伺いたいが、事務局からはどうか。

《事務局》

長狭高校の定時制課程も、様々な事情を抱えた子どもたちが集まってくる。人数は全学年合わせても10名程度という小規模ではあるが、その子たちはそこまでの過程の中で様々な問題を抱えながら、その子たちなりに本当に苦労してきている。それが定時制に入って、先生方から手厚い指導を受ける中で、社会に出るに

あたって必要な様々な学びや、訓練とまではいかないが、対話をしながら卒業していく。こういう表現が正しいかどうか分からないが、学びのセーフティネットという役割を、定時制高校、そして通信制高校は担っている。

【 座 長 】

決して生徒数だけで考えてはならないということか。他にはいかがか。

【 委 員 】

これまでに定時制高校の卒業式に4回招待された経験がある。私が校長をしていた小学校の生徒が、長狭高校の定時制で卒業式を迎えた。二人いたが、一人は小学校時代に不登校であり、もう一人は親のネグレクトであった。そのような事情を抱えた子どもたちが高等学校を卒業する日を迎えたことは非常に感動的であり、感慨深く思った次第だ。また、学年の区分がなく進路に合わせて履修科目を選択できるという意味で、今は定時制高校や通信制高校のような単位制高校が、不登校の子どもや発達障害を抱えた子どもたちには必要になってくると思う。

【 委 員 】

定時制に通っている子どもたちは、私見ではあるが、そこに通えているからまだいいのかもしれない。定時制等にも通えず、家に籠もっている子どもが、実は世の中にはたくさんいて、先日の新聞報道では小中学校で不登校が20万人を超えた、という話もあり、また別の報道では通信制の生徒数が24万人という、その中にはもちろん不登校ではない子もいるだろうが、増えているとのことである。全国の高校生の7%が通信制に通っているというところで、通信制の必要性について感じるころである。学校に通えない子どもたちをどのようにして通えるようにするか、または受け入れられる場所をどう増やしていくかが大切である。今安房地区においても約100人の子どもたちが学校に通えず、違うところで学ぶなどしているという報告が上がっている。それらの子どもたちが数年後そのままスライドして高校段階まで上がってきたときに、高校等に通えるようになっていなければならないのであれば良いのだが、通えていないのであれば対応が必要である。18歳を超えた後にどのようにして地域と関わっていけるかということも大事なところになってくる。そういった子どもたちが将来自立した社会人となれるよう、学校と地域が一体となってしっかり導いてあげなければならない。

【 委 員 】

鴨川市教育委員会では、適応指導教室に不登校の子どもたちが通っている。そこで指導する先生方から、中学時代に不登校で適応指導教室に通学していた子どもが定時制や千葉大宮の通信制に進学し、無事に高校を卒業できたという報告をここ数年受けるようになったという話を聞いた。定時制や通信制協力校が安房地区に存在する意義はたいへん大きい。子どもの数は少なくとも、教育の機会を確保する法律等もあり、そういう意味で、この両校の今後の存続には大きな教育的意義がある。

【 委 員 】

鴨川市民という視点でお話させていただく。基礎資料の5ページの「定時制の概要」を御覧いただきたい。長狭高校と館山総合高校の定時制の生徒数がそれぞれ11名と16名であるが、長狭高校の居住市町別の割合を見ると鴨川市在住の生徒が100%である。夜間定時制ということを考えた時に、館山市から鴨川方面の最終電車というのが9時18分館山発であり、鴨川市在住の生徒が館山総合の定時制で学ぶという選択肢が基本的にはない。仮に長狭高校の定時制がなかった場合には、子どもたちが定時制で学ぶという選択肢がなくなってしまうというのが、安房地区の交通機関の整備状況の現状である。少し先走った話になるが、学校再編を考えていく中で、生徒数の推移や地域のニーズは当然重要な要素になるかとは思いますが、そこで学ぶ子たちの通学状況が実際にどうなるかということも加味した中で、学びのセーフティネットという部分を公教育の立場でやはり維持し続けていかななくてはならないと感じる。定時制を必要としている子どもが今後も一定数存在し続けるという予測のもとで検討していかなければならない。

【 座 長 】

アクセスの問題については、電車の本数が増えるとよいが、そこはJRの問題であろう。

【委員】

不登校について、各高校には入学後に中途退学してしまった生徒がいると思うが、やはり希望を持って入った高校であればしっかり卒業させてあげたいというのが保護者の思いである。もし在学中に不登校になるような原因があるのであれば、そのあたりを追求していかなければならないと感じた。

【座長】

中途退学の状況ということだが、事務局から説明いただいてもよろしいか。

《事務局》

高校にも、学校に来られなくなってしまう生徒は一定数おり、以前はそのまま退学していたケースも多かったが、最近ではきめ細かく対応しながら、何とか最後まで面倒を見て、できるだけ進級させて卒業まで持っていこうという方向性になってきている。そのため、中退率自体は下がっている状況である。また、全日制高校に毎日通えなかったとしても、中退せずに通信制高校に転学するなどして学びを継続する方法もあり、できるだけ社会から孤立させないようにという観点で対応している状況である。

【座長】

他にはいかがか。

【委員】

先ほど公共交通の関係で、主に電車の話があったが、バスの関係で発言させていただく。鴨川市では現在、基本的に全ての路線バスが国、県、あるいは市の補助によって維持されている。バスの利用者自体が非常に減少している中で、行政の負担も非常に大きくなっており、そういう面では維持存続が非常に難しくなっている。バス事業者の側でも乗務員不足が深刻な状況になっている。乗務員が高齢化し、60代あるいは50代の乗務員の割合が非常に高くなっており、今後、続々と退職していくことが見込まれる。また、働き方改革により、来年の4月からは自動車運転者の拘束時間を短くしていかざるを得なくなる。主に宅配事業者の件が新聞報道等でクローズアップされているが、実はバスもそれに該当する。持続可能な公共交通をどうしていくかということについてバス事業者と話し合う中で、実際に一般のバス路線の減便を検討している状況である。このため、生徒が高校に通学する交通手段についても、生徒自前での通学手段も含めて、もう少し柔軟にならないかを感じている。

【委員】

安房地区の子どもにとっては、選択肢が多くバリエーションに富んだ学校の中から選ぶことができる。そして、各学校では、定時制、通信制協力校も含め、特色のある展開をしている。この環境は、移住をしてきた方にも大変魅力的である。一方で、子どもの数自体は減少しており、さらにはその中で木更津のほうに流出していくことも事実である。非常にもったいないと感じた。魅力あふれる安房地区の県立4校+安房西高校さんには、地元の子どもはもちろんのこと、逆に木更津・君津方面の中学生からも選ばれる学校に是非なっていたきたい。競う環境を選ぶ子にも、挨拶や礼儀を大切にする子にも選ばれるような学校になっていたきたい。

⑤ 全体を通して

【座長】

それでは最後に、全体を通して何か意見があれば伺いたい。感想でも、事務局への質問でも、自身の発言に対する補足説明でも構わない。

【委員】

鴨川市の状況を説明させていただきたい。鴨川市では、医療福祉と観光が主要産業となっており、それぞれの業種に従事されている方を合計すると市全体の3割を超えている。そういった特徴的な地域構造にあっ

て、これまではそうした産業に人材を送り込む教育機関が存在していた。医療で言えば、亀田医療大学があり、亀田医療技術専門学校があり、そして長狭高校では医療・福祉コースを設置している。一方、観光では、城西国際大学観光学部が立地していたものの、残念ながら昨年4月をもって東金に移転してしまった。つまり、城西国際大学から地域の観光産業等の人材を供給していくという流れを十分に作ることはできなかったという状況である。実際に地域の産業のニーズ、例えば求人などを見ても、地域社会のニーズと、高校、大学あるいは専門学校で提供している教育サービスがミスマッチを起こしている状況なのではないだろうか。地域の産業を支えていく、地域の特色をこれからも維持していく、そういう観点では、いろいろな機能があったほうがいいが、それではどうしても規模は小さくなっていく。様々な特色をそろえる方向とするならば、特に君津方面へ学生が流出している状況を考えると、少々突飛な話かもしれないが、国際バカロレア（IB）認定校を目指してみるなども考えたらいかがだろうか。今、全国各地でインターナショナルスクールの設置が進んでおり、そうした学校に日本人も通わせていくという流れが出てきている。

【 座 長 】

他になければ次に進む。

議事の「(2) その他」に移るが、何か議題があるか

(意見なし)

ないようなので、進行を事務局にお返しする。